



私のドイツ語の家庭教師

若き日の熱意を思い起こさせる ドイツでの日々

1969年に当社がドイツ AEG 社の銅板の制御について技術提携することが決まり、私もその技術員の一人に選ばれた。出張前の数カ月間、在日ドイツ人からドイツ語を学んだ。目的地はベルリンの技術本部にあり、西ベルリンのキルヒナー家に下宿することになった。ご主人は AEG 勤務であり、言葉の勉強と2社が密接な交流を図れるようにとの AEG の温情でもあった。キルヒナー家にはたくさんのドイツ語教師がいた。まずはご主人。第2次世界大戦へ参戦、ベルリン空輸も身をもって経験した人で、閑な時はワインを持ってきていろいろと話を聞かせてくれた。

突然東西の壁ができ、東ドイ

ツの彼女と逢えなくなってしまう。悲嘆にくれていると、前の家の幼馴染の娘さんが「何故そんなに悲しんでいるの、こんな近くに私がいるのに」と云ったそうだ。奥様は美しい物静かな方で、そんな大胆なことを云ったとは未だに信じられない。当時は夜中には絶えず銃声が鳴り響き、今日は何人無事に



瀬古 茂男

明電舎 相談役

西へ逃げのびたかも話題であった。

末っ子のザビーネは小学2年生の女の子で、なかなか可愛いおませな子だった。新聞を読ませると実に正確に、流暢な発音で読む。一度動物園に連れて行った帰りにご馳走をしたら、他の子供達は遠慮していたのに、ザビーネだけは色々なものを注文し満足げであった。日本人の先生なのがよほど自慢だったのだろう。良い先生に囲まれてドイツ語は多少上達したが、名詞の性別には苦勞をした。ザビーネ先生に、絨毯が何故男性名詞かを聞いてみた。しばらく考えていたが、「ママ」と云いながら母親の部屋に行った。しばらくして母親の声が聞こえた。「そういうことはパパに聞きなさい!」

私の帰国後20年でベルリンの壁は崩壊した。これらの写真は東西ドイツ、苦勞したドイツ語、そして若き日の熱意を思い起こさせるものである。

私の思い出写真館